

## 資料解読の醍醐味

- 「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集」 から -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2019-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 栄美子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/20163">http://hdl.handle.net/10291/20163</a>

## 資料解読の醍醐味— 「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集」から

竹内 栄美子\*

### 1 1920年代から30年代——大衆の時代を映す資料

一昨年、駿河台の中央図書館に研究用基礎資料として「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集」が架蔵された。丸善雄松堂から出たこの資料は、通常の書籍の形態ではなく、DVD版2枚に収められたおよそ3000点のデジタル資料である。これは、中川成美立命館大学名誉教授を代表とする「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会」が収集した膨大な資料をデジタル化したもので、従来目にする事のなかった貴重な資料が含まれている。

これまでプロレタリア文化運動の資料としては、およそ40年前に「日本社会主義文化運動資料」として戦旗復刻版刊行会から『戦旗』『文藝戦線』『プロレタリア藝術』『プロレタリア文化』『ナップ』『コップ』『プロレタリア演劇』『プロレタリア映画』など、多くの復刻雑誌が刊行されるということがあった。この雑誌復刻が基礎資料となってプロレタリア文化運動研究を牽引したことは言うまでもない。そして、今回の「昭和戦前期プロレタ

---

\*たけうち・えみこ／明治大学 文学部教授

リア文化運動資料集」も、それらと同様に、1920年代から30年代にかけて、とりわけ関東大震災後に促進されたモダニズム文化やプロレタリア文化が流行した大衆の時代に、文学、演劇、映画、美術などさまざまな領域での文化運動がいかに盛んであったかを伝えるものである。雑誌や書籍のみならず、映画や演劇のチラシやパンフレット、当時のままのガリ版刷りのニュースやビラなど、ジャンル横断的な文化運動の多様な資料をさまざまに見ることができる。文庫本が発刊され、円本が流通し、築地小劇場が開設されるなど、まさに文化の大衆化が進んだ時代のエネルギーを感じ取ることができる資料群といえるであろう。

## 2 収録資料と分類

収録されたものは、プロレタリア文学および書誌研究の第一人者であった故浦西和彦関西大学名誉教授の所蔵資料661点(3000画像)、市立小樽文学館所蔵の池田寿夫旧蔵資料85点(480画像)、法政大学大原社会問題研究所所蔵資料1337点(5300画像)、札幌大学所蔵の松本克平旧蔵資料773点(2000画像)、ほかに日本近代文学館所蔵の貴司山治旧蔵の『プロ・フォト・ニュース』もある(画像数は概数)。なによりもこれらの膨大な資料がDVDで検索できるようになっているのが便利であり、画像も鮮明に見ることができる。凡例によれば、これらの資料は9つの分野に分類されたという。各分類の概要については、次のとおりである。

- ① 文学 文学者団体に関わる資料。『レフト』『労農文学』『文学通信』等の稀少文芸雑誌。主な団体は日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)やその地方支部、労農芸術家聯盟など。252点。
- ② 演劇 劇団、公演など演劇活動に関わる資料。築地小劇場、左翼劇場、大阪戦旗座、京都青服劇場、移動劇団のメザマシ隊、新協劇団、新築地劇団、文戦劇場など多数の劇団に関するチラシ、パンフレット、舞台写真、内部資料。1669点。
- ③ 映画 映画団体、上映会に関する資料。上映会告知のビラ、ニュースなど。労働者向けの上映イベントが各地で開催されていた。主な団体は、日本プロレタリア映画同盟(プロキノ)。プロキノ大阪支部。73

- 点。
- ④ 美術　美術家団体、絵画、マンガに関する資料。主な団体は日本プロレタリア美術家同盟（ヤップ）。『プロ美術』『労働者マンガ』など稀少資料多数。『マヴォ』関連資料もあり。117点。
  - ⑤ 写真　日本プロレタリア写真家同盟に関する資料。幻の『プロ・フォト・ニュース』。2点。
  - ⑥ 音楽　音楽家団体、音楽イベントに関する資料。日本プロレタリア音楽家同盟（P・M）。『音楽新聞』や『P・Mニュース』など。大阪支部の稀少資料を含む。20点。
  - ⑦ 思想・宗教　社会科学や哲学、宗教批判に関する資料。主な団体はプロレタリア科学研究所、戦闘的無神論者同盟、反宗教闘争同盟等。『われらの世界』、『われらの科学』、『戦闘的無神論者』、『反宗教』、『反宗教闘争』などの稀少機関紙・パンフレット等。125点。
  - ⑧ 政治（上部団体）　文化団体の中央機関、宣伝に関する資料。檄文、声明書、ニュースなど。主な団体は全日本無産者芸術団体協議会（ナツプ）、日本プロレタリア文化聯盟（コップ）とその地方協議会。戦旗社の内紛や、文芸戦線社の分裂を伝える資料を含む。338点。
  - ⑨ その他　上記分類にあてはまらないもの。日本プロレタリア・エスペランチスト同盟（ポエウ）、プロレタリア図書館、ソヴェートの友の会、救援会などに関する資料。左翼文化団体以外の各資料を含む。261点。

### 3 研究会を組織して

現在、筆者竹内とプロレタリア文学研究者の数名が呼びかけ人となり、この資料を読む研究会を本学研究棟の会議室を利用して、二ヶ月に一回開催している。本学文学部には、かつて平野謙や本多秋五など著名な文芸評論家が専任教授として所属し、プロレタリア文学に関する批評が多く書かれたという実績がある。研究会では、大和田茂法政大学講師、島村輝フェリス女学院大学教授、鳥羽耕史早稲田大学教授をはじめとした当該領域の専門家が毎回参加し、すでに七回を数えた。

膨大な資料群のなかから何をまず読むか迷ったが、活版印刷が多いなかで、孔版および手書きコピーの「日本プロレタリア文芸運動史 資料1929年に各作家にもとめたアンケート」を取り上げることにした。これは、『日本プロレタリア文芸運動史』（叢文閣、1930年）や『プロレタリア文学史』（理論社、1954年）で知られる山田清三郎が作家たちにアンケートを実施し、42人の回答を得たものである。回答者42人は次のとおり。今野賢三、金子洋文、加藤由蔵、中野正人、佐野袈裟美、加藤一夫、岡下一郎、吉田金重、伊東憲、秋田雨雀、山川亮、武藤直治、犬田卯、藤森成吉、新井紀一、内藤辰雄、宮嶋資夫、宮地嘉六、藤井真澄、森山啓、大森二郎、立野信之、細田民樹、明石鉄也、岩藤雪夫、江馬修、越中谷利一、小島勗、鹿地亘、佐々木孝丸、壺井繁治、中野重治、葉山嘉樹、橋本英吉、平林たい子、細田源吉、佐佐木俊郎、横本楠郎、窪川いね子、黒島伝治、山内房吉、本庄陸男。

このなかには文学事典にも立項されていない、あまり知られていない作家もいるが、昭和期になってプロレタリア文学運動が盛んになる以前、大正期の労働文学で活躍した作家たちが数多く見られるのが特色といえる。これらの作家たちが自筆で書いているアンケート本文を解読するのは、くせのある読みにくい文字のため困難ではあったものの、好奇心を刺激される大変楽しい作業でもあった。履歴や業績に加え、なぜプロレタリア文学にたずさわようになったのか、その理由が作家本人の手で書かれていたからである。ここでひとりひとりの紹介はできないけれども、それぞれの作家の来歴を垣間見ることができる非常に興味深い内容であった。

42人のなかに、現在の文学史的知識からいえば、プロレタリア文学の作家として著名な小林多喜二、宮本百合子、徳永直らがいないこと、『種蒔く人』の今野賢三や金子洋文がいても小牧近江がいないこと、大正期労働文学や社会主義文学の作家たちがいるなかで小川未明がいないこと、なども研究会では話題になった。アンケートが実施されたのが1929年なので、宮本百合子は湯浅芳子とともにソ連滞在中でまだプロレタリア文学運動に参画していないということ、小林多喜二も『蟹工船』を発表したばかりでまだこの時点では東京に来ていないこと、徳永直も『太陽のない街』を発表したばかりであること、などが確認されアンケートの対象外だったのか

と推測された。なお、山田清三郎はこの結果を表紙にメモ書きしている『日本プロレタリア文芸運動史』には使用していない。むしろ、戦後に書かれることになる『プロレタリア文学史』に使われたようである。

#### 4 多角的な文化芸術の開花——研究成果を積み重ねる

この自筆アンケートのみならず、たとえば文学分野では『文藝戦線』の後継誌となる『レフト』や『労農文学』、植村諦が編集兼発行人で秋山清、小野十三郎、岡本潤らの作品が掲載されている『文学通信』も見逃せない重要資料である。これまで『戦旗』派資料の多くが復刻されてきているが、労農関係やアナキズム関係の資料は、いまだ復刻版が出ていないものも少なくなく、本資料集によって右のような重要雑誌が一括参照できるようになったのもありがたい。『戦旗』派のみならず、労農派やアナキズム系なども含めて文化運動をいっそう立体的に把握することができるからである。現在、研究会では自筆アンケートに続いて『労農文学』を読んでいる。

このような文学だけでなく、築地小劇場で上演されたイブセン「人形の家」、心座第11回公演「全線」プログラムや左翼劇場第12回公演「全線」のパンフレットなど、膨大な演劇関係資料も見逃せない。点数として演劇関係資料が群を抜いて多いのは、新劇俳優であった故松本克平氏による資料のためでもあるが、当時、演劇がいかに大衆の心をつかんでいたかということだろう。演劇だけでなく、映画や美術についても同様のことが言える。このような資料群からは、文壇や画壇を越えてどれほど多くの表現者がいたかということ、また大衆がいかにこの時代の文化芸術を享受していたかということがうかがえる。まさに戦争となる総動員体制の時代のまえに、文化運動が包蔵していた溢れるようなエネルギーによって多角的な文化芸術が開花していたことが理解できる。本資料によって、この時代を解明する研究がいっそう進展することは間違いない。

なお、本資料については、研究会メンバーである北海道教育大学旭川校准教授の村田裕和氏による論文「『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』から見えてくるもの」(『昭和文学研究』第77集、昭和文学会、2018年9月)が、資料集を編集された立場から詳しく考察されていて参考になる。

また、同じく研究会メンバーである伊藤純氏（プロレタリア作家貴司山治氏のご子息で資料集の編者）が解説を終えた自筆アンケートについて『社会文学通信』110号（日本社会文学会、2019年5月刊行予定）に記事を掲載されることになっている。大和田茂氏による論考「円本文学全集と自筆「小伝」——経歴を語り出した作家たち」（『日本古書通信』2018年12月号）は、自筆アンケートから着想を得た文学全集における作家年譜についての研究である。本資料についての論集として、中川成美・村田裕和編『革命芸術 プロレタリア文化運動』（森話社、2019年2月刊行予定）も近く上梓される。これらの研究成果も併せて参照されたい。（2019年1月6日）